

安倍総理の中南米訪問について

対談 外務省 前中南米局長 山田 彰 × ラテンアメリカ協会 会長 佐々木 幹夫

「日本が中南米に帰ってきた」

佐々木 今回の安倍総理のラテンアメリカ（中南米）歴訪は大きな成果を上げたとうかがっていますが、あらためてその成果についてうかがいたいと思います。

山田 総理の2国間中南米訪問としては小泉首相以来10年ぶりということもあり、文字通り「歴史的訪問」になったと感じています。トリニダード・トバゴ、カリブ地域については日本の総理として史上初めて、コロンビアについても史上初めての訪問でした。カリブでは初の日・カリコム首脳会合を開催するとともに、12カ国との首脳会合を実施しました。また、5カ国6都市、11日間の訪問は安倍総理の外国訪問としては最長のものであり、経済・民間ミッションという面でも約70人のCEOクラスを含む約250名が同行しました。中南米の有識者、メディアの中には総理の訪問を評して「日本が中南米に帰ってきた」という言い方をしたのもありました。

日本と中南米の経済関係では、近年投資が増え、緊密になってきていますが、日本の国内においては中南米の重要性が必ずしも visible にはなっているとは言えません。今回、総理が5カ国を訪問し、日本が中南米と共に働こうというメッセージを発したことで、「日本が中南米に帰ってきた」と受け止められました。すなわち、日本は中南米にとって、これまでもそうでしたが、これからもますます重要なパートナーであるということを確認した国はもとより、それ以外の国もそうしたメッセージを受け止めてくれたのではないかと、思います。訪問した国々ではもちろん、2国間関係の強化、国際場裡での協力等について具体的なテーマを話合いました。また、トリニダード・トバゴでは、初めて日・カリコム首脳会合を実施しました。今年は日・カリブ交流年ということで、日本とカリブ諸国の関係を強化しようと努めてきています。カリブ諸国の国々は一つ一つは小さく、これまで必ずしも日本との関係が深いとはいえませんでした。国際場裡での発言力は強いし、実は日本と同じような課題を抱えています。そう

した国々に対して日本の総理が訪ねてきて、カリブ諸国との関係を強化していくための具体的な政策を発表できたことについては先方の高い評価を得たと考えています。

もう一つ大事なことは、総理がスピーチの中で、これからは総理・閣僚が頻繁に中南米にやって来る、というメッセージを発表したことです。従って、安倍総理の訪問もこれが最後ということではなく、近い将来、中南米を訪問することがあると思います。安倍総理自身は中南米に対する関心を従来からお持ちであるし、その関心は今回ますます深まったと思います。また総理の周辺の方々の中には中南米は初めてという人も多数いらっしゃいましたが、企業のトップの方々も含め、中南米が発展している現在の様子を実際に見、日本に対して近しい感情を持っているということを肌で感じられたことは、これからの日本と中南米の関係にとって大きな意義があったと考えています。

佐々木 ありがとうございます。私自身、ラテンアメリカ協会の会長を引き受けた背景には、仕事で中南米との関係が長かったということがあります。その後の推移をみると、カリブはこれからだと思いますが、中南米諸国に対する日本の関心の高まりがビジネスだけではなく、政治の上でも今回関係が深まったということで、これから中南米への関心がますます高まっていくことを期待すると共に、ラテンアメリカ協会の活動としてもやりがいのある局面になってきたと感じています。

日本メキシコ EPA は成功物語

佐々木 全体的なお話をうかがいましたが、今度は個別の国についてうかがいたいと思います。最初の訪問国であるメキシコについては、最近、自動車産業を中心に進出が続いていますが、シンガポールに続いて本格的 EPA が締結された国です。私も日本貿易会の会長をしていた時のことで思い出がありますが、締結から10年が経過し、新しい環境の下で EPA を見直そう

という動きがあると聞いています。それに対するメキシコ側の反応、対応はどんなものでしたか？

山田 シンガポールとの EPA は、同国が都市国家ということもあり、日本にとってセンシティブな品目があったわけではなく、メキシコとの EPA は、日本にとっていわば最初の本格的 EPA でした。メキシコとの EPA は成功物語とされており、他の EPA のモデルともなっています。特に近年、日本から自動車産業を中心に投資が急速に増えています。投資の増加について、ペーニャ・ニエト大統領も日本企業がメキシコを信頼してくれている証拠であり、有難いと繰り返し発言されていました。EPA に関しては、この間、例えば「ビジネス環境改善委員会」などを通して、ビジネス環境の整備などについて話合いが行われ、それがいくつかの成果となって表れてきています。EPA の再協議については、EPA 自体に一部品目について見直しをする、という条項が入っているのでそれを中心に協議します。しかし、それは主にメキシコから日本に入ってくるものが中心であるところ、そうした見直し品目だけではなく、日本からメキシコに輸出する産品についても協議して、さらなる貿易・投資の拡大に結び付けていきたい。ただ、まだ具体的にどこをどういうふうに変えてゆくか、ということまでは話がいていません。これから始めるということです。

日本コロンビア EPA は交渉加速化

佐々木 次にコロンビアについては、サントス大統領との間で EPA の早期締結ということで基本的合意が得られたとうかがいました。しかし、私は中味については、コロンビアの方に解決すべき課題があると理解していますが、この点についてはどうですか？

山田 コロンビアとの EPA 交渉は首脳間で交渉の加速化に合意しました。我々としても、今年に入って特に、交渉を加速化させるべく努力してきました。総理がコロンビアを訪問する前、7 月にも全分野ではないが、いくつかの分野について交渉会合を行いました。そして、9 月 12 日の週に、東京で行う予定です。コロンビア側の事情としては、5 月、6 月と大統領選挙の季節であったので、その期間中は思い切ったことは打ち出せなかったのではないかと感じています。しかし、日本側もコロンビア側もできるだけ早い段階で高いレベルの合意を目指そうという意図が示されたし、今回、大統領と総理の双方からそういう意思が示されました。ただ、交渉は交渉であり、お互いに厳し



山田前局長（左）と佐々木会長（右）

い要求を出し合うという状況であるので、まだゴールが見えているという段階にはありません。出来るところから進めていく、ということです。十幾つかの分野がある中で、これまでほぼ合意に達したという分野もあります。しかし、EPA のコアというか、一番難しいところは「市場アクセス」であり、それについては、まだまだ作業が必要かな、と考えています。ただ、申し上げたように、高いレベルの合意を早急に作りたいという政治的意図ははっきりしているので、最終的にはそうした合意が出来るものと考えています。

高まる日本チリ租税条約への期待

佐々木 次にチリですが、バチェレ大統領が再登場ということになったわけですが、ここ 10 年位のタームで見ると、日本の企業が比較的集中的に投資したのは、ブラジル、近年のメキシコは別として、チリですね。鉱山関係が多いので、投資規模も大きくなります。ラテンアメリカの中では優等生といわれるチリではありますが、日本の企業から見ると、大きな問題があるというわけではありませんが、若干投資環境が悪化しているという印象があります。そうした意味で、2007 年に締結された EPA の見直し時期に来ているといえるし、もう一つ、租税条約の早期締結について経済界はずっと要望してきたことであり、安倍総理も今回、これを是非加速させたい、という発言があったと聞いております。我々としては出来るだけ早く締結されることを期待していますが、見通しはいかがでしょうか？

山田 チリの投資環境、ビジネス環境は中南米の中では比較的良いもの、と考えています。それでも、さらなる改善を目指して協議し、努力する余地はあるでしょう。小さい話かもしれませんが、在チリ邦人の運転免許証の切り替えの話も総理が首脳会談で言及しました。租税条約についてはおっしゃる通りであり、日本

企業の期待が高いということも承知しています。ただ、租税条約の締結候補国が沢山あり、日本国内でどのようなプライオリティをつけていくか？私個人としては、租税条約のようなものはどんどん作っていった方がよいと思いますが、なかなか簡単ではありません。日本とチリとでは、考えている租税条約の内容が違うということもあります。そうした問題はありますが、大事なことは結果を出すことであり、租税当局同士の折衝を活発にして、将来の租税条約に結びつけたいと考えています。日本企業のチリに対する投資も増えていくことが期待されますので、租税条約を結ぶ価値は高まってゆくと思います。そうしたことを念頭に、我々としても政府内で働きかけをしてゆきたい、と考えています。

チリとの間では防災分野の協力が盛んです。チリを中心に第三国研修などを通して、中南米諸国との協力も強化していきます。日本の防災協力は国際協力の柱になっていますし、来年は仙台で国連世界防災会議を開催するということもあります。チリと日本は同じ地震国であり、被災の経験と支援を通していろいろな絆が生まれています。今回の訪問に際し、チリから南三陸町にモアイ像が寄贈された物語を記した『モアイの絆』という本のスペイン語版が安倍総理からバチレ大統領に手渡されました。このような、人と人の心をつなぐような協力を日本とチリ、そして日本と中南米の間で大事に行きたいと考えています。

スポーツ分野でも絆を深める日本ブラジル関係

佐々木 最後にブラジルについてうかがいます。造船、インフラ開発、石油・ガス開発と多分野にわたり、日本企業の活動を後押ししていただいたということで経済界としては感謝しております。ビジネスをやってゆく上でなかなか難しい部分のあるブラジルではありますが、お忙しい日程で、滞在時間も短かった中で、現地で様々なイベントに参加されたと聞いています。我々としても、今回の総理の訪問によって日本企業が問題としている投資環境や制度が改善されてゆくこと、より前に進んで行くことを期待しております。

絆という話が出ましたが、2016年のリオのオリンピックの後には東京に引き継ぐことになるので、こういう機会に外交的にも政治的にも関係強化をしていただければ、と希望します。個別の問題については、様々な企業が大使館や領事館を通じて問題提起をしていると思いますが、我々はそういう意味での支援を期待してい

ます。

何と言ってもポテンシャルの大きい国であるので、日本企業も注目しています。特定分野ではチリなどに注目が集まりますが、様々な産業で「協同」できるのはブラジルではないかと思っています。そうした意味で、局長のお立場から何か経済界にサジェスションはありますでしょうか？

山田 ブラジルとの関係は、政治、経済、文化、そして日系人の方々の存在、日本にいる日系ブラジル人の方々と本当に広い範囲に渡っており、いろいろな関係の強化が図られてきています。会長からブラジルでビジネスをしていく上での問題、いわゆるブラジル・コストといわれる問題についてご指摘がありました。インフラの未整備の問題等、日本として注文をつけていくことはいろいろな分野、いろいろなレベルにあるでしょう。しかし、ブラジルは、日本の官民がそういう注文をしている、ということをネガティブに捉えているわけではなく、日本がそうした問題をアミーゴとして一緒に解決しようと言ってくれている、と捉えています。従って、ブラジルの経済界は、日本からのそうした意見をむしろ歓迎しています。総理は日伯の経済界との会議にも出られましたし、様々な形でブラジルの経済界の方たちと接触する機会がありました。日本は上から目線ではなく、パートナーとして共にブラジルが抱えている問題を解決してゆこう、出来るだけ協力しよう、ということを言いました。また、ブラジル自身がやっていかねばならない問題についても、日本が助言、あるいは協力をいろいろなレベルで行っていくことができると思います。それは総理の訪問一回で片づくことではなく、いろいろな場所・レベルで対話と協議を継続していくことだろうと思います。ブラジル側は自分達の問題を理解しています。ただ、いずれの国でもそうですが、理解していてもなかなか手がかからないという面はあります。ブラジルは日本側とやっていこうという気持ちはあると思いますし、日本に対する親近感是非常に強い国です。日本からのアドバイスや協力であれば喜んで受ける、という姿勢はあると思います。

リオから東京へオリンピックの夢のタイマツが繋がっていくということで、スポーツの分野でも大いに協力してゆこうとしています。今回、東京オリンピックに向けて「Sport for Tomorrow」というイニシアティブの下、政府のみならず、官民を挙げてスポーツを通じて世界と協力し、繋がってゆく、という方針を日本

は打ち出しています。ブラジルでは、今回の総理訪問で、ブラジルにおいて日本サッカーの発展に貢献したジーコやドゥンガ等、ブラジルの関係者への「感謝の集い」を開催しました。サンパウロでは、日系の方々を中心でしたが、スポーツ団体と交流する会合も開かれました。サッカーではブラジルが日本に貢献してくれましたが、卓球、柔道、野球、ソフトボールとなると、例えば柔道では、ブラジルがオリンピックで一番メダルを取っているスポーツですが、日系人の方々の指導や日本の協力があつたと言えます。スポーツの分野ではブラジルに限らず、これから中南米とますます絆、協力を深めてゆくことが出来るのではないか、と考えています。

佐々木 最後に、習近平首席のラテンアメリカ訪問が時期的に重なったことについて、現地では何か感じたことはありましたでしょうか？

中南米は世界で最も親日的な地域

山田 習近平首席は、ブラジルで BRICS 首脳会議があったということで、ブラジルとその周辺国を訪問しました。安倍総理の歴訪は様々な政治日程の関係で今年の夏になりました。そういう意味で時期が近接したというのは、偶然といえば偶然です。日本と中南米、中国と中南米の関係を比較すると、貿易においては中国と中南米の方がずっと多くなっていますが、投資面では日本からの方がずっと上回っています。日本からの投資は、技術移転や雇用創出を伴い、日本の考え方、日本と中南米が共に働くという良い形で現地に受けられています。現地では日本企業に対する強い期待があるということを感じます。中南米の人達は日本の良さを十分分かっているのです、むしろ、日本は中南米からの期待に対してもう少し応えてほしい、という気持ちがあるのではないかと、思います。そういった意味で、今回、総理が経済ミッションと共に5カ国を訪問したことは非常に歓迎された、と考えています。

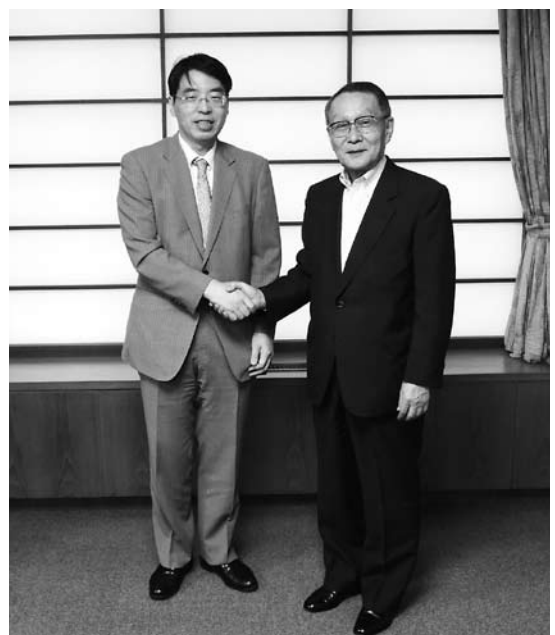
中国と中南米の関係が平和裏に中南米の持続的発展に貢献する限りにおいて、我々はそれを歓迎すべきであって、問題にすることではないと考えます。我々としては、日本の良いところをさらに知ってもらおうと考えますし、中国からいろいろな方が中南米に来られるのに対して、日本からの訪問が少ないのであれば、もっと日本からも行ってもらい、日本と中南米の関係をさらに深めるための方策・施策を採っていく必要があるのではないかと、考えるべきでしょう。繰り返し

になりますが、中南米で日本は、日系人の存在もあるし、日系企業がこれまで活動してきた実績もあるし、官民が行ってきたいろいろなプロジェクトもあり、日本に対する親近感があります。私は、中南米は世界で最も親日的な地域であると思っています。近年では、日本の科学技術に対する期待とあこがれ、ポップカルチャーを含めた日本のソフトパワーに対する親しみも存在します。そういった意味で、地球の反対側ということで、距離的には一番遠いが、日本と価値観を共有し、日本にこんなにも親近感をもってくれる国々に対して、日本人はもう少し関心を持ってもいいのではないかと、思います。今回の総理の訪問は日本が中南米とパートナーとして共に行動していくということを内外に示す良い機会となりました。

佐々木 有難うございます。ところで、安倍総理はこれから閣僚の訪問を増やすと言っておられますが、具体的に閣僚が行くという計画はあるのでしょうか？

山田 総理がスピーチで明示的に述べたわけですから、今後閣僚レベルの訪問が着実に増えていくものと期待しています。しかし、今、具体的に何か決まっているわけではありません。

佐々木：有難うございました。中南米諸国は、メキシコ以南とすると、人口は約6億人位、経済規模も大きいし、民度も高い。そして何ととってもほとんどの国が親日国です。加えてエネルギー、食糧、鉱物資源が豊富であり、今後日本にとってますます大事な地域に



なと思っています。ラテンアメリカ協会としても、この地域の潜在的な魅力、そしてビジネス環境を出来るだけ多くの人に知ってもらうために活動し、情報発信してゆきたいと考えています。今回お話をうかがい、安倍総理の中南米訪問の成果として、中南米との間のパートナーシップが認識され、さらに強化されたと確信しました。結果として我々経済界もエンカレッジされたと感じています。是非、これからもラテンアメリカ協会の活動にご支援をいただきたいと思います。これまでのご支援に感謝申し上げますが、これからも中南米地域の強力なサポーターとして私どもの活動を見守っていただければ、と思っています。

山田 ラテンアメリカ協会は日本の対中南米外交の推進に当たり、非常に大事な組織であり、重要な役割を果たしてきていると思います。佐々木会長になられて、新生ラテンアメリカ協会は会員の数を増やし、活発に活動しています。中南米外交が前向きな展開をしている中で、ラテンアメリカ協会が果たす役割、あるいは果たせる役割はさらに大きくなっています。私としても、これからも引き続き、対中南米外交のために努力したいと思いますし、ラテンアメリカ協会の発展をお祈りし、また、出来ることがあれば、お役に立ちたい、と思います。

(山田 彰前局長は2011年1月より2014年8月29日まで中南米局長として在任されていましたが、10月2日付で駐メキシコ大使に発令されました。)

(2014年9月4日)